慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「資本論」とヨーロッパ労働運動
Sub Title	Das Kapital and labour movement in Europe
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.9 (1967. 9) ,p.1054(62)- 1084(92)
JaLC DOI	10.14991/001.19670901-0062
Abstract	
Notes	『資本論』刊行百年記念特集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670901-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「資本論」とヨーロッパ労働運動

飯田鼎

一　はしがき
二　一九世紀ヨーロッパ労働運動における『資本論』――窮乏化法則を中心として――
三　帝国主義段階と社会主義革命――共同体と社会主義革命の問題――
四　結び

一　はしがき

「資本論」第一巻が、ドイツ、ハンブルクの書肆、オット・マイスナーから出版された[1]一八六七年を中心とする前後数年は、国際労働運動・社会主義運動にとっても、まことに忘れることのできぬ重大な時機にあたっていた。一八六四年、ロンドンにおいて創立をみた国際労働者協会（第一インターナショナル）は、イギリス、フランスおよびドイツを中心とするヨーロッパのプロレタリアートの国際的な連帯の機関として発展をつづけ、その成果はひろくヨーロッパの労働者階級の注目するところとなっていた。だが、インターナショナルの躍進はまた、同時に、それが直面する課題の困難さをも明らかにしたのであって、その運動における理論的指導者であったマルクスとエンゲルスは、まずつぎのような諸問題に直面していた。㈠一八六六年頃からヨーロッパ全体にたかまった労働者の普通選挙権獲得運動――政治的改良の運動をどのように評価し、且つこれをいかに革命に結びつけるか、㈡プルードン主義の日和見主義の影響をいかにして排除し、労働者階級の運動と科学的社会主義との有機的結合をはかるか、㈢一八六八年末にはじまっていた恐慌とこれにともなう資本家攻勢の激化と戦争の危機にたいする組織的抵抗、㈣バクーニンの無政府主義的分派にたいするきびしい批判と闘争、およそこのような実践上の諸問題が、彼らの前に立ちはだかっており、彼らは文字通り、これらと格闘していたということができる。[2]このような苦闘のなかで、「資本論」第一巻がまとめられたという事実は、一体われわれに何を物語るであろうか。一八六六年八月二三日付の「クーゲルマンへの手紙」のなかで、マルクスは、つぎのように書いている。

「……私はジュネーヴ大会の準備に多くの時間を費してはいますが、そこにでかけて行くことはできませんし、また行こうと思いません、というのは、私の仕事のこれ以上の中断は不可能だからです。私は、私が、この仕事によってなすことを、私が一大会で一身でなしうるどんなことよりも労働者階級にとってはるかに重要なことと考えています」[3]（傍点引用者）。

まことに「資本論」は、「経済学批判」の書であると同時に、平穏無事な書斎のなかでではなく何よりもはげしい実践的な運動のなかで、「世界を変革する」ために貧困と病苦と闘いながら書かれたといっても過言ではない。[4]

そのときから一世紀、われわれは、「資本論」刊行一〇〇年を迎えようとしている。なぜ「資本論一〇〇年」をわれわれはいま記念しようとするのか？　このような問を発するならば、あるいは嘲笑をうけるかもしれない。しかしわたくしは、百年に一度しかないこの機会に際し、この意味をよく考えてみたいと思う。

「資本論」第一巻があらわれたヨーロッパは、機械制大工業の発端（＝産業革命の開始）以来、丁度百年を経過していた。一七六四年、ハーグリーヴスのスピンニング・ジェニー（ジェニー式多軸紡績機）にはじまり、ジェームズ・ウォットの

蒸気機関の発明とつづく産業革命の過程は、その背後にアメリカの独立とフランス革命という二大政治変革という歴史の進行にささえられながら、イギリスにおいてはじめて発展したブルジョア社会を完成することとなった。古典派経済学の発展と急激な階級分解、地主、産業資本家および労働者の発生と農村共同体の崩壊、階級闘争と労働運動の発展、一八四〇年代、マルクスとエンゲルスが、イギリスに注目しはじめた頃、古典派経済学は、こうしたイギリス市民社会の激動のなかに、その理論的代弁者として、J・S・ミルを迎えつつあったのである。思うに、マルクスの「資本論」への歩みは、このブルジョア社会の確立、そしてその開花期の前兆ともいうべき一八四八年の革命からはじまるとすれば、「資本論」一〇〇年を記念することは、たんに、刊行以後一〇〇年のみならず、それ以前の一〇〇年を含めて考えるべきではなかろうか。その意味で「資本論」第一巻は、産業革命期から、資本主義の爛熟期と呼ばれるヴィクトリア中期に至るイギリス経済社会を素材として、そこから、まことに天才的な「資本の運動法則」を構想するという偉業の成果ではあったが、同時にそれは、イギリス産業革命以来、今日まで、二〇〇年を経た資本主義の分水嶺をなすものとして、一八六七年を考えてみたいと思うのである。「資本論」以前の一〇〇年と「資本論」以後の一〇〇年、この両者の間に横たわる隔絶、そのおどろくべきコントラスト、これらを考慮することなくしては、「資本論」第一巻の刊行一〇〇年を真に祝うことの意味が薄れるのではなかろうか。なぜならば、「資本論」を読むことによって強烈に印象づけられることは、その発刊が、今日までの一〇〇年間にどういう意義を担ってきたかということと同時に、イギリス産業革命にはじまり、今日の国家独占資本主義の段階に至るブルジョア社会の歴史を顧みる場合、「資本論」においてマルクスが体系化した諸法則は毫もその価値と輝きとを失っていないことである。

つぎにわたくしは、「資本論」以後の一〇〇年の歴史において、現在、われわれの立っている時点の重要性を思わないわけにはいかない。一九五九年のスターリン批判の開始以来、今日までの世界共産主義運動にみられる未曽有の混迷と矛盾、そして最近では敵対的行動にまで発展しつつあるといわれる中ソ論争の経過を考えるとき、共産主義運動の正しい理念とは何であるかを更めて考えざるをえないのである。マルクス主義と修正主義との関係をめぐる国際共産主義運動の分裂は、レーニンが、その「帝国主義論」において日和見主義＝修正主義の本質を暴露した一九一七年の時点とは、およそ比較にならないほどの規模と拡がりをもって進展しており、そのもたらす影響もまたはかり知れない。従って「戦争と平和の問題」にたいする正しい態度も、この問題にたいする科学的な認識なくしては到底えられないところである。史上最大の独占資本主義国アメリカ合衆国の被圧迫民族としてのヴェトナム民族への非道な侵略、殺戮および荒廃化は、実にこの中ソ対立の間隙を縫って進行しており、一方わが国もまたこの侵略戦争への実質的な加担の途を歩まされているという現実も銘記されなければならない。「資本論」発刊一〇〇年の意味を考える場合に、わたくしは、こうした全世界的な規模において展開していく体制と体制との矛盾、民族と民族との死闘、そして階級と階級との闘いを、きわめて具体的に考えざるをえないのである。いうまでもなく「資本論」は、厳密に経済学上の天才的な業績であり、それを無視して政治的イデオロギーの観点のみで論ずることは間違っているが、さきにも指摘したように、マルクスの「資本論」執筆の動機は何よりも、革命家としての彼の良心と科学的な批判精神から発したものであったことはいうまでもない。「資本論」において確立された諸命題が、今日もなお妥当するかという経済学上の諸問題は、一八六〇年代のヨーロッパ、まさしくポーランド民族独立闘争、アメリカにおける奴隷解放闘争――南北戦争――、それらを背景とする第一インターナショナルでのマルクスとエンゲルスの活動と、一〇〇年後の今日、その規模こそ異なれ、体制と階級そして民族の問題をめぐるさまざまな問題が全世界的なスケールをもって展開される現代のわれわれの時点とを相似の形において考えるとき、より一層の正確さをもって把握されるのではなかろうか。

（1）　マルクスは、一八六七年四月三〇日付の書簡で、S・マイアーにあてて、つぎのように印象的に書いている。

「……なぜあなたに返事をあげなかったか？　僕はたえず墓のふちをさまよっていたからです。僕は僕の著作を完成するためには、

あらゆる労働可能な時間を利用しなければならなかった。僕はこの仕事のために健康もこの世の幸福も家族も犠牲にしてきた。この説明にこれ以上を加える必要はないと思います。僕はいわゆる『実行』家たちと彼らの知恵とを笑います。もしも人が牛であろうと思うなら、もちろん人類の苦悩に背を向けて自分自身の身を心配することができるでしょう。しかし、もし僕が僕の本をすくなくとも原稿だけでも完成しないで死んだなら、僕は自分をほんとうに非実行的だと思うでしょう。

著作の第一巻は二、三ヶ月のうちにハンブルクのオット・マイスナーからでるでしょう。本の題名は『資本論・経済学批判』です。原稿を持ってくるためにドイツにきました。ここでは、ロンドンへの帰途、ハノーヴァーの一友人のもとに数日滞在します。

第一巻は『資本の生産過程』を包括しています。一般的科学的展開のほかに、僕は、非常に詳しく、これまで利用されたことのない官庁資料によって、最近二〇年間のイングランドの――農業および工業の――プロレタリアートの状態をのべた、同じくアイルランドの状態をも。あなたにはいうまでもなくおわかりのように、すべてこれらは僕にはただ対人立証として役立つにすぎません。

来年の今日は全著作がでていることと思います。第二巻は理論のつづきと結びとを、第三巻は一七世紀中葉以来の経済学の歴史を与えます……」。(Karl Marx, Friedrich Engels; Briefe über „Das Kapital". Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Stalin-Institut beim ZK der SED. Dietz Verlag Berlin 1954) 岡崎次郎訳「資本論にかんする手紙」上、国民文庫版、一四四―一四五頁。

(2) この点にかんしては、拙著「マルクス主義における革命と改良」（一九六六年、御茶の水書房）第四章を参照。

(3) 同上、一四一―一四二頁。

(4) たとえば、一八六四年一〇月四日付のマルクスのクリングスへの手紙をみよ。

「……私は去年一年中病気でした（疔とねぶとができて）。――それがなければ、私の本、『資本』、経済学はもうでていたでしょう。いまでは二、三ヶ月のうちにはついにこれを仕上げて、ブルジョアジーにふたたびたちあがれないような一撃を理論的に加えたいと思っています。ごきげんよう、そして、労働者階級はつねに私において一人の忠実な前衛闘士を見出すであろうことを、あてにしていて下さい」（同上、一三三頁）。なお、横山正彦「マルクス主義における『資本論』の地位」をも参照されたい（雑誌「経済」一九六七年五月臨時増刊――『資本論発刊一〇〇年を記念して』――所収）。

二　一九世紀ヨーロッパ労働運動における『資本論』

――窮乏化法則を中心として――

「資本論」刊行一〇〇年を迎えて、われわれがマルクス主義研究について想いをよせることは余りにも多いというのが、現在のわたくしの実感である。すなわちまず、最近にとみにその研究が盛んになりつつある初期マルクス[1]の研究がある。一八四八年の革命までのいわゆる「初期マルクス」と、それ以後、一八五〇年代から六〇年代にかけての経済学批判体系の完成[2]の時期との関係、プラン問題として知られるマルクスの経済学体系の構想をめぐる問題[3]、宇野弘蔵教授を中心とする「資本論」と「金融資本論」および「帝国主義論」をめぐるマルクス主義経済学の方法論をめぐる問題[4]、あるいは、最近、生誕一〇〇年を契機としてその研究が従来より一層たかまったマックス・ウェーバーとのさまざまな面からの比較的研究[5]など、数えあげればきりがないのであるが、わたくしがここで問題とするのは、「資本論」が、一九世紀ヨーロッパ労働運動のどのような局面において現われざるをえなかったか、そして、「資本論」第一巻の完成は、当時の労働運動にたいしてどのような影響をあたえたかという点である。この問題を明らかにするためには、やはり、一八四〇年代からのマルクスの経済学への歩みのなかに、すでに萌芽的にみられる資本論体系への志向を探らなければならない。

マルクスの経済学的著作にみられるいちじるしい特徴は、つねに実践的な運動の途上に横たわる経済的な諸問題の解決のため試みられたものであるということである。「資本論」第一巻の中核的部分を構成すると思われる「第三篇絶対的剰余価値の生産」、「第四篇相対的剰余価値の生産」および「第七篇第二三章資本主義的蓄積の一般的法則」は、それぞれ剰余価値の法則と資本蓄積＝窮乏化法則を解明したものであるが、これに到達するためにはいくつかの段階と理論的実践的苦悩を経なければならなかった。[6] マルクスの経済学の研究は、一八四二年から四三年にかけての「ライン新聞」の主筆としての活動体験における農民の経済問題への関心にはじまるといわれるが、[7] マルクスをして、国民経済学＝古典派経済学の批判を通じて、従来の哲学・法学の研究から経済学研究へ一歩前進させる決定的契機となったものは、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」であったことはよく知られている。しかしこの時点でのマルクスは、革命的民主主義の段階にとどまっており、マル

クスの理論的核心ともいうべき剰余価値の法則の萌芽はみられず、多分にヒューマニズムの残滓を残しており、その意味では、早くものちの天才的な構想の片鱗を示すものとして忘れられてならないのは「経済学・哲学手稿」であろう。「手稿」は何故に重要であるのか。それはまさしく、「経済学・哲学手稿」というその標題にみる如く、哲学的把握の上に立った経済学を意味しており、古典派経済学への批判の開始の時期における最初の経済学的な研究の成果であり、重要な特徴をみることができる。「手稿」における「疎外された労働」は、生産過程における賃労働を被収奪者として、収奪者としての資本と直接的に対立させ、古典学派が主張するところの等価交換の法則の否定、従ってまたリカードウの労働価値説を拒否しているのであって、ここでは、「疎外」の本質を追求することにより、資本蓄積の法則を確立しようとする苦闘をみることができるにもかかわらず、剰余価値の法則にたいする理解はみることができない。剰余価値についての経済学的な把握は、マルクスが、一八四七年の末から四八年のはじめにかけて、ブリュッセルのドイツ人労働者に講演した内容を、一八四九年四月「新ライン新聞」に掲載した「賃労働と資本」において萌芽的にみることができる。この論文の重要性は、マルクスみずから冒頭において力説しているように、一八四八年の革命の直接的体験の結果として書かれたものであり、階級闘争や民族解放闘争の物質的基礎をなしている経済関係についてのべることを意図したものであった。[8] いうまでもなく、この論文は、マルクスの理論の発展段階を反映して、まだ商品、貨幣および資本という形態が労働力の商品化を基礎として展開する運動を体系化するところまでは進んでいないが、[9] 機械化の進展にともなう失業人口の増大、労働者間の競争の激化が資本の増大をもたらすとして、のちの「資本論」における資本制蓄積の一般的法則の確立への道を明らかに志向していることを示している。この理論的態度の確立は、リカードウ派社会主義者――とくにジョン・フランシス・ブレイ――を中心とする広範囲な読書によってえられたものであることは疑いないけれども、それのみにとどまらず、たとえば、たんに分配関係のみに眼を奪われていたリカードウ派社会主義者にたいする批判的克服の上に築かれたものであって、さらに、一八四八年の恐慌および革命における大衆の貧困と怒りを背景にしていた点は、とくに重要である。この点は、とくにやや前に書かれたフリードリッヒ・エンゲルスの「イギリスにおける労働者階級の状態」に示唆されるところが大きかったと考えられる。[10] しかしながらわれわれが、マルクスの剰余価値の法則について考えるべきことは、その確立にあたって、イギリス資本主義のどの時期を素材としていたかということである。第三篇絶対的剰余価値の生産、第八章労働日を読むと、そこには一四世紀中葉から一七世紀までの労働日延長のための強制法および十八世紀末期から一九世紀初頭にかけての産業革命の進展とともにはじまるいわゆる原生的労働関係の支配にたいして、労働者階級のこれにたいする抵抗、標準労働日のための闘争について歴史的・理論的に克明な分析と解明がなされているのを知るのであるが、注目すべきことは、剰余労働にたいする工場主の渇望、「生きた労働を吸収することによって吸血鬼のように活気づき、それを吸収すればするほどますます活気づく、死んだ労働」[11]としての資本の剰余価値への熱望を証明すべく、一八四七年、いわゆる十時間法の通過以前の原生的労働関係の支配の時期をとらえているばかりではなく、むしろ一般には、工場立法の制定＝十時間法の通過によって原生的労働関係が克服されたと考えられている一八五〇年代以後にその根拠を求めていることである。一八五〇年代から、「資本論」第一巻のあらわれた一八六〇年代を経て、かの歴史的な一九世紀末恐慌の最初にして最大の怒濤ともいうべき一八七三年恐慌までの時期、いわゆるヴィクトリア黄金時代と呼ばれるこの時期を素材として、マルクスが、剰余価値の法則を定式化しているという事実を、われわれはどのように理解すべきであろうか。

一八五〇年以後、好況の到来とともに工場法はその規制力を失い、剰余労働にたいする飽くことなき渇望がはじまったのであるが、「搾取の法的制限を欠いた産業部門」においてはその傾向が一層いちじるしかったことを、マルクスはきわめて鮮明に且つ実証的に叙述している。「労働日を延長しようとする衝動、剰余労働を求める人狼のような渇望」を、一八六〇年代のマルクスは、まずレース製造業において見出す。一八六〇年一月一四日、ノッティンガム市の公会堂で開かれた会合

の議長の公言、「九歳ないし十歳の児童たちが午前二時、三時、四時に彼等の不潔なベッドから引離されて、ただ露命をつなぐだけのために、夜の一〇時、一一時、一二時まで労働を強制され、その間に彼らの手足は痩せ、身体は萎び、容貌は鈍くなり、そして彼らの人間らしさは全く石のような麻痺状態に硬化して、見るも無残な有様である」。しかしこうした惨状は、スタフォードシアの陶器製造業、マンチェスター、バーミンガム、リヴァプール、ブリストル、ノリヂ、ニューキャスル、グラスゴーなどの北部の大工業都市に当時ひろまっていたマッチ製造業、あるいは壁紙製造業、製パン業をはじめとして、スコットランドの農業労働者、鉄道従業員、婦人服仕立工、鍛冶工などに、まさしく原生的労働関係そのままの苛酷な労働条件が強いられていた事実を指摘する。[12] このような絶対的剰余価値の生産は、主として小規模経営・軽工業部門において、とくに妥当するところであって、工場法は、その限りにおいて全く有名無実化していたことは明らかである。しかし一方において、このような絶対的剰余価値の生産＝無制限な外延的な搾取の部門の存在にたいして、機械制工場および重工業部門においては、次第に相対的剰余価値の生産の移行が行われ、全体として労働時間が短縮される傾向を生み出したのであって、マルクスはこの現象について、つぎのような有名な説明を加えていることはよく知られている。

「資本主義的生産のある程度の成熟段階では、個別的労働者、すなわちその労働力の『自由な』販売者としての労働者が、無抵抗に屈服するものであるということは、若干の生産様式においては労働日の規制の歴史が、他の生産様式においては、この規制のためにいまなお継続中の闘争が、明瞭に証明するところである。したがって、標準労働日なるものの創造は、資本家階級と労働者階級とのあいだの長期間にわたる多かれ少なかれ伏在的な市民戦争の産物である」[13]（傍点引用者）。

社会政策としての工場立法の制定＝一〇時間法＝標準労働日の確定が、国民的労働力にたいする資本の配慮――大河内一男教授のいわゆる社会的総資本による労働力の維持・保全培養[14]――ではなく、資本家階級と労働者階級との間の長期間にわたる市民戦争の結果であることを強調していることに注目すべきである。一八四〇年代から五〇年代にかけては、絶対的剰余価値の生産から相対的剰余価値生産への移行の時期であり、その両者が併用されるに至った時期に相当する。[15] 「次第に労働者階級の反抗が、強圧的に労働時間を短縮して、まず最初に本来の工場に標準労働日を課することを国家に強制するや否や、したがって労働日の延長による剰余価値生産の増大に終局が告げられた瞬間から、資本はすべての力と充分な意識とをもって機械体系の急速な発達による相対的剰余価値生産に没頭した。[16] マルクスは、「機械経営が労働者に及ぼす第一次的影響」として、(a)資本による補助的労働力の領有。婦人労働と児童労働、(b)労働日の延長、(c)労働の強化をあげているが、このような諸契機を媒介として「機械装置の資本主義的使用は、一方では労働日の無制限な延長への新しい強力な動機をつくり出し、またこの傾向に対する抵抗を打破するような仕方で労働様式そのものと社会的労働体の性格を変革するとすれば、他方では、一部は労働者階級中の従来は手の届かなかった諸層を資本に役立てることにより、一部は機械に駆逐された労働者を遊離させることによって、資本の命ずる法則に従わねばならない過剰労働人口を生産する」。[17] かくして絶対的・相対的剰余価値の生産は、資本制蓄積の一般的法則としての相対的過剰人口の法則と密接に関連するのであるが、すでにしばしば指摘したように、剰余価値の法則および資本制蓄積の一般的法則の確立は、資本論第一巻の理論的内容に素材を提供したところの、いわゆる原生的労働関係の支配的な時期＝産業革命初期の歴史的事実の洞察によってなされたのみならず、むしろそれ以上に一八四〇年代の後半以後、まさしくマルクスが「資本論」第一巻の完成に全精力を集中しつつあった時期に、きわめて大きな地位を与えていることこそが問題なのではなかろうか。

何故ならば、イギリス資本主義発達史の一般的理解によれば、一八四七年から四八年にかけての恐慌にともなう社会不安、ケンニングトン広場におけるチャーティスト運動に代表されるような大衆的騒擾以後、相対的安定期がはじまり、「みじめな三〇年代、そして飢餓の四〇年代」は過去のものとなり、イギリス資本主義は一八五七年から五八年の一時的な恐慌および一八六六年の痙れんを除けば、一八七三年の恐慌までヴィクトリア黄金時代を享受するというのであるが、実にマル

クスはこれにたいして、資本制的蓄積の一般的法則の例解として、一八四六年から六六年のこの時期をとりあげていることである。もちろんマルクスといえども、一八五〇年および六〇年代のイギリスが、資本蓄積にもっとも好都合な時期であり、同時にそれによって労働者階級が、間接的に利益をうけていることを否定するものではない。しかしそれにもかかわらずそれは「労働者階級が依然として『貧乏』で、有産階級のために『恍惚とさせる富と力との増加を生産した』のに比例して、『貧の度を減じた』にすぎない[18]のであって、資本制蓄積の一般的法則＝窮乏化法則は、この時期において依然として貫徹するし、その例証として、「工業プロレタリアート及び農業労働者のうちの、最悪の支払いを受ける部分、すなわち労働者階級の過半をなす部分が顧慮されていることに注目しなければならない。すなわち、(a)一八四六年――一八六六年のイギリスについて、(b)イギリス工業労働者階級の低賃金層、(c)移動民、(d)恐慌が労働者階級の最高給部分に及ぼす影響、(e)イギリスの農業プロレタリアート、(f)アイルランドの六つの指標をあげ、「資本の蓄積と共に階級闘争と、従って労働者の自意識とが発展するにつれて、被救恤貧民の現実の範囲に関してますます欺瞞的になるところの政府の統計[19]」を駆使して、ヴィクトリア黄金時代が、果して、誰のための黄金時代であったか、資本の蓄積にたいする貧困の堆積、窮乏化法則の貫徹を実証しているのである。この(a)―(f)に至る諸指標についてみるに、イギリス資本主義社会におけるブルジョアジーの繁栄と対照的なプロレタリアートの窮乏化の程度を要約した(a)を除いて、(b)、(c)、(e)および(f)がいずれも就業の不安定な低賃金労働者であり、このような低賃金労働者層とこれをとりまく相対的過剰人口の圧力の不断の影響下においては、熟練高給労働者といえども、ひとたび、恐慌ともなれば賃金および労働条件の切り下げの不可避性を説いているのであって、とくに注目すべきことは、マルクスが、資本主義的蓄積の一般的法則としての「窮乏化法則」を基礎づけるにあたって、たんに賃金だけを考慮していたのではなく、むしろこれとならんで、労働生活条件を重要な要因としていたことである。すなわちマルクスは、一八六三年、枢密院の調査にもとづいて、農業労働者、絹織物工、裁縫女工、革手袋製造工、靴下編工、手袋織工および靴工を「イギリス労働者階級の最粗食部分」と規定していることからも明らかなように、労働者階級の栄養の問題が重視され、またこれに劣らぬ重要性をもつと思われる住宅および生活環境の問題、あるいは公衆衛生についても鋭い観察をしていることを忘れてはならない。この点の重要性は、窮乏化の問題が、今日でさえも、たんに実質賃金の高低の問題に矮小化される傾向がみられることからも注意される必要がある。労働者階級の窮乏化の問題は、たんに賃金のみならず、労働時間、労働強度、労働環境、労働者の住宅条件、生活環境および公衆衛生などの広範囲な要素についての調査および検討なくして、は正しく把握されえないことを示唆しているといえよう。だが、マルクスが低賃金労働者層のなかでも、とくに農業プロレタリアートに格別の関心を払っているのは何故であろうか。一八六三年、流刑および懲役刑に処せられた罪人の給養及び従業状態に関する政府の調査によれば、『イングランドの監獄における罪人の常食と、同じ国の救貧院における被救恤民及び自由な農村労働者のそれと入念に比較してみれば、前者は後の二部類のいずれよりもはるかにヨリ良く給養されていることが争う余地なく示される[22]』という報告からも明らかなように、その生活状態の劣悪さは想像に難くない。しかも、こうした農業労働者の状態をさらに一層悲惨ならしめたものとして、住宅問題が存在した。「そして農村労働者の状態はこの点では多年来ますます悪化してきた。今や彼にとっては住居を見出すことは、恐らく過去数世紀間よりもはるかに困難であり、またみつかっても、それは以前よりもはるかに彼の要求に副わないものである。殊に最近二、三〇年のあいだに弊害は急激に増大し、農村民の住宅事情は今では極度に悲惨になっている[23]」。農業労働者の住宅条件を極度に劣悪ならしめたものは、各教区における農村労働者の数を最小限に制限することを金銭上の利益とするところの大地主の政策の結果であった。すなわち、農業労働者およびその家族は、結局のところ被救恤的貧窮におちいらざるをえないところから、一教区における農業人口の定着は、すべて明らかにその教区の救貧税の追加となり、地主の負担が増加するところから、自分の所有地に労働者の住宅を建てさせないばかりか、家屋の取り壊しが進行したのである。「最近一〇年間、イングランドの八二一地方で家屋の破壊

が進行した結果、非居住者（すなわち彼ら自身の働いている教区における）となることを強制された人員は別としても、一八六一年には一八五一年に比して五パーセント三分の一大きい人口が四パーセント半小さい住居に追い込まれた[24]」のである。大地主はこれによって救貧税をまぬがれることができたのであるが、逆に隣りの田舎町や開放部落は投げ出された労働者を受けいれることとなった。家居破壊とこれにともなう農業労働者の追いたてがいかに進行し、その結果として、家蓄同様の小屋におし込められ、毎日、農場まで往復一〇マイル以上も歩かなければならなかったかを、マルクスは、ベッドフォードシア、バークシア、バッキンガムシア、ケンブリッジシア、エセックス、ヘリフォードシア、ハンティンドンシア、リンカンシア、ノーサンプトンシア、ウィルトシア、ウースタシアなどの南部農業地帯の諸州について考察している。

要するに、ここでマルクスが強調しているのは、窮乏化法則は、たんに賃金低下傾向の法則に解消させるべきではなく、その他の諸条件の悪化傾向、とくに住宅問題の重要性であり、これとの密接な関連のもとに相対的過剰人口の創出、被救恤的貧窮の増大という悪循環の激化[25]であり、ヴィクトリア黄金時代の繁栄が、実に何によってささえられていたかという点である。だがその意味で、マルクスがもっとも注目し、読者に訴えているのは、(f)アイルランドである。

イギリス最初の植民地としてのアイルランドは、一八六六年には、人口、五、五〇〇、〇〇〇人となり、一八四一年に比べて二、七〇〇、〇〇〇万人を失ったといわれ、とくにそれは、猛烈な飢饉の年、一八四六年からはじまったものであり、アイルランドは二〇年足らずのうちに、その人口の一六分の五を失った[26]のであるが、一八六一年から六五年までの五ケ年間の移民が五〇万以上にのぼり、その内訳が、一五エーカー以下の借地農の消滅すなわちそれらの集中の結果であって、一八五一年から六一年までの間に、一五―三〇エーカーの借地農場の六一、〇〇〇の増加、三〇エーカー以上のそれは一〇九、〇〇〇の増加であったことを意味している[27]。アイルランド農業における資本の集積・集中、従って農業人口の減少は、同時に、「家畜と人間の生活手段を供給する農耕地」および穀物の減少としてあらわれざるをえない。このような農耕地・農業人口および土地生産額の変動が、実に、大地主、大借地農業者、産業資本家の急激な増大をもたらすものであることを、マルクスは豊富な統計によって詳細に分析しているのであるが、それはつぎのような資本の運動法則の帰結というべきである。農業人口の減少の結果としての耕作地の放棄、その牧草地への転換、それは土地生産物を激減させずにはおかない。借地農の合併と耕地の牧場化による総生産物のより大きな部分の剰余生産物への転化は、当然、地代と借地農業利潤の増大をもたらす。かくして蓄積されたアイルランドの資本は、農業の外で、工業および商業に投ぜられ、相対的に減少した人口数に比較して膨脹したのである。しかも、一八四六年、一〇〇万人以上もの貧乏人のみを殺したといわれる馬鈴薯飢饉は、実に貧民を殺戮したのみで、地主および産業資本家にはほとんど損害を与えず、アメリカ合衆国への移民の増大をもたらし、輸出貿易のもっとも有利な部門のひとつをなすという結果となったのである[28]。しかも国内に残ったアイルランドの労働者の運命については、農業における革命が、移民と同じ歩調をとったため、一八六〇年代においても相対的過剰人口は一八四六年以前と同様に大きく、従って賃金は同様に低く、農村における窮乏が再び新たな恐慌を起そうとしているのであって、かくしてアイルランドは、「三、五〇〇、〇〇〇の人口でもまだ貧乏であり、そしてその貧乏は、人口過剰のためであるから、イングランドの牧羊場であり放牧場であるというアイルランドの真の使命を果すためには、その人口減少はまだまだ進行せねばならない[29]」というマルサスの人口論のブルジョア的理論がそのまま妥当することになるのであって、同時にまたこの政策がおしすすめられる限り、資本の蓄積は貧困の堆積を必然化させずにはおかないのである。

以上にのべたように、資本制蓄積の一般的法則の例解として、一八四六年から六六年の二〇年間に、いかにマルクスが注目したかは明らかである。その事実は、この時期における科学的社会主義の建設の事業とともに、マルクスとエンゲルスがその発展のために全力をつくした第一インターナショナルの実践活動と切り離して論ずることはできない。周知のように、第一インターナショナルは、国際的なプロレタリアートの連帯の機構であったとはいえ、これを支配していたものは、初期

においてはイギリスの労働組合主義者、オーエン主義者、フランスのプルードン主義者、ドイツのラッサール主義者であり、あるいはその他のもろもろの思想、たとえばゲルツェンのナロードニキ的思想、バクーニンの無政府主義、イタリアのマッツィーニの思想であって、これらの諸思想の影響をうけたヨーロッパ各国のプロレタリアートの要求を統一し、社会主義革命の前衛部隊をつくり上げるためには、これら雑多のブルジョア的・小ブルジョア的思想を克服し、マルクス主義の科学的理論によって訓練されなければならなかった。そしてその理論的な課題はまさしくマルクスに課せられたのである。[30] 当時、マルクスとエンゲルスは、ジョージ・オッジァを先頭とするイギリス労働組合主義者と密接な協力関係をとることを余儀なくされていたが、しかしJ・S・ミルの経済学の影響下にあるその理論と政策のブルジョア的性格を看破し、その労働者階級への滲透を極力防止しなければならなかった。[31] ラッサール主義、プルードンの思想についてもほぼ同様なことがいえるのであって、「資本論」はまさに、そのような理論を排除して、資本制生産様式が永遠でありえないこと、それは労働者と労働諸条件との分離過程を完成して、一方の極では、社会的生産手段および生活手段を資本に転化し、反対の極では民衆を賃金労働者に、自由な『労働貧民』に転化する過程であり、資本とは、「頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と脂とを滴らしつつ生まれる」[32] ものであることを明らかにしたのである。

(a)―(f)に至るマルクスの「資本主義的蓄積の一般的法則の例解」について、筆者がややくわしく検討してきたのは、この諸指標が、大体において、イギリスの全労働者階級にあてはまるものであり、ヴィクトリア黄金時代として知られる相対的安定期においても、窮乏化法則が貫徹するという証明によって、労働運動における日和見主義分子に痛打を与えようとする彼の意図を明らかにしたかったからにほかならない。とくに銘記すべきことは、マルクスのアイルランド問題への深い関心と洞察である。第一インターナショナルが、ポーランド問題をはじめ、民族解放闘争になみなみならぬ努力を傾けたことはよく知られているが、アイルランドにおける寄生的大土地所有制の廃棄は、マルクスとエンゲルスにとっては、イギリスにおけるプロレタリア革命の前提条件であり、しかもそれが世界的な規模のプロレタリア革命の狼火と考えられていた以上、アイルランド問題は、民族問題であるとともに、プロレタリア革命との密接な関連のもとに把握されていたということができる。一八六〇年代、マルクスは、資本主義が次第に終焉の時期に近づいていると感じた。

「……いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である。

この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則の作用によって、諸資本の集中によって、実現される。常に一人の資本家が多くの資本家を滅ぼす。この集中と並んで、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と並んで、ますます大規模となる労働過程の協業的形態、科学の意識的技術的応用、土地の計画的利用、共同的にのみ使用され得る労働手段への労働手段の転化、結合された社会的労働の生産手段として使用されることによるあらゆる生産手段の節約、世界市場網への世界各国民の組み入れ及びそれと共に資本主義体制の国際的性格が発展する。この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、堕落、搾取の度が増大するのであるが、また、絶えず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も増大する。資本独占は、それとともに且つそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和し得なくなるところの一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者は収奪される。[33]」

「資本論」第一巻の結論ともいうべきこの文章のなかに、われわれは何を読みとるべきであろうか。いうまでもなく、資本の集積・集中にともなう独占の支配の確立、貧困化の一層の深まり、すなわち、窮乏化法則の貫徹と労働者階級の組織的な抵抗、そして最後に来るべきものとしての社会主義革命であるが、ここで注目すべきことは、マルクスが、すでに「資

本独占」という概念によって、独占資本主義（＝帝国主義）の到来を予測しており、資本主義的所有の最期を告げるところのプロレタリア革命が、この時期において必然化することを示唆していることである。当時のイギリスは、いうまでもなく、自由主義の開花期であり、資本の集積・集中はみられたとしても巨大独占体の出現はみられなかった。従って一般によく指摘されるように、マルクスは独占資本主義という新たな段階の到来を予知することなしに、プロレタリア革命を考えた（一八四七年から四八年、「共産主義の原理」から「共産党宣言」の時期のマルクスとエンゲルスは、まさしくそうであった）ように解釈し易い。しかし、そうではなく、「資本論」においては、すでに「資本主義の新しい段階」としての独占資本主義が予測されており、そのようなあらたな諸条件の上で、プロレタリア革命の勃発を予知していたことである。この点を見誤るならば「賃労働と資本」から、「経済学批判要綱」および「経済学批判」をへて「資本論」に至るマルクスの経済学研究の発展と深化とを無視することになるばかりか、その革命理論の面でも、一八四八年以後、まったく変化も前進もなかったかのような誤謬におちいるのである。

いまひとつ重要なことは、「資本論」のこの一節をよくよむと、そこに、マルクスが、一八五二年二月、「ラッサールへの手紙」[34]のなかで、のべている経済学研究のプラン――のちに「経済学批判」の序説において明らかにされ、「プラン問題」として「後期マルクス」理解のための重要な問題となった――が、何故あのような形で、構想で、生まれざるをえなかったかが明らかになる。それは実に、たんなる一学究の経済学研究の「計画」というようなものではなく、深くプロレタリア革命の問題とかかわり合っているからである。

（1）いわゆる「初期マルクス」の研究は、ルカーチ、マルクーゼをはじめ、内外ともに枚挙に遑ない。ここでは、わが国における本格的研究として、良知力「ドイツ社会思想史研究」（未来社、一九六六年）をあげるにとどめる。

（2）最近の研究として、小林弥六「経済学批判体系の生成」（御茶の水書房、一九六七年）があるが、通史的・叙述的で、分析的な視角が不充分である。

（3）これについては、遊部久蔵編著『資本論』研究史（ミネルヴァ書房、一九五八年）第四章プラン問題がくわしい。

（4）最近、ほぼ同時に出た三種の「資本論」発刊記念号のうち、「思想」（一九六七年五月 No.515）で、この点について、宇野教授と梅本克己氏とが「『資本論』と『帝国主義論』」について対談しているのが注目をひく。なお、宇野氏の「社会科学の根本問題」（青木書店、一九六六年）も、いろいろな点で、問題になる書物である。

（5）安藤英治「マックス・ウェーバー研究」は非常に興味深く感ずる。レヴィットの業績（カール・レヴィット、柴田・脇・安藤共訳「ウェーバーとマルクス」、未来社、一九六六年）の影響を強くうけている労作である。なお、大塚久雄「社会科学の方法――ウェーバーとマルクス」（一九六六年、岩波新書）も面白い。内田義彦「資本論の世界」（一九六六年、岩波書店）や石渡貞雄「現代資本論Ⅰ」も、それぞれ特色ある資本論研究である。

（6）この点についてのすぐれた研究としては、杉原四郎「ミルとマルクス」（一九六七年改訂版、ミネルヴァ書房）および同氏「マルクス経済学への道」（一九六七年、未来社）がある。

（7）マルクス「経済学批判」（国民文庫版）序言。

（8）Werke, Bd. 6, S. 398. 邦訳第六巻「賃労働と資本」三九三頁。

（9）これについては、大島清「『資本論』への道」（大内兵衛・向坂逸郎編集「唯物史観」第四巻、一九六七年四月、『資本論』刊行一〇〇年特集所収）参照。

（10）マルクス「資本論」向坂訳第一巻第三分冊（岩波文庫版）一五四頁。

（11）マルクス、前掲第一巻第二分冊、一六〇頁。

（12）前掲、一八〇―二〇四頁。

（13）前掲、二八〇頁。

（14）服部英太郎「社会政策総論」（未来社、一九六七年）一三五頁。

（15）内田義彦「資本論の世界」一二七頁以下参照。

（16）「資本論」第一巻第三分冊、一七一頁。

（17）前掲第三分冊、一六八頁。

（18）前掲、第四分冊、一六〇頁。

(19) 前掲、一六五頁。
(20) 前掲、一六六頁。
(21) 前掲、一七一頁。
(22) 前掲、二〇七頁。
(23) 前掲、二一三頁。
(24) 前掲、二一四頁。
(25) 前掲、二三一頁。
(26) 前掲、二四二頁。
(27) 前掲、二四二頁。
(28) 前掲、二五一頁。
(29) 前掲、二六三―二六四頁。
(30) これについては、拙著「マルクス主義における革命と改良」（御茶の水書房、一九六六年）参照。
(31) 杉原四郎「ミルとマルクス」一八二―一八三頁。
(32) マルクス、前掲、三四四頁。
(33) 前掲、三四八―三四九頁。
(34) マルクス「資本論にかんする手紙」（上）七四頁。

三　帝国主義段階と社会主義革命

――共同体と社会主義革命の問題――

さきに指摘したように、「資本論」第一巻は、一七六〇年代、イギリス産業革命によってはじまった機械制大工業＝産業資本の確立以後、自由競争段階の開花期、そして独占資本主義段階の前夜において、その一世紀にわたる産業資本主義の発展を素材としてまとめられた。そこにおける資本の運動および資本蓄積の法則、従って窮乏化法則の貫徹を実証したものであって、それが、独占資本主義の前夜にあって、その到来を予知しつつ書いていたとすれば、窮乏化法則は、当然、独占資本主義段階にも妥当しなければならない。

マルクスは、一八四八年の革命以後もなお社会主義革命は、イギリスを中心としておこり、すみやかにドイツおよびフランス両国に波及するという見解を基本的に支持しつつ、その晩年には、東ヨーロッパ、とくにロシアにおける革命に深い関心を払ったことはよく知られている。(1) しかし後者の場合ですら、プロレタリア革命の成功は、ひたすら西ヨーロッパの先進国における革命の成否に深く依存しているという観点は堅持されており、このような革命の帰趨を決定するものとしてのヨーロッパ先進国の重要性は少しも失われてはいなかったのである。(2) 一八八九年、エドウアルト・ベルンシュタインは、シュトゥットガルトで開かれたドイツ社会民主党大会にあてた「社会主義の前提と社会民主党の任務」のなかで、マルクス主義を根本的に修正しようとする意図のもとに、「民主主義と社会主義」との関係についてふれ、イギリスの社会民主主義＝フェビアン主義を礼賛し、その視点から、労働組合といえども、それが、ブルジョア民主主義の枠を超えるならば、社会主義と民主主義に抵触すると非難しているが、(3) ベルンシュタインの意図は、あくまでもそれが民主主義の不可欠の機関であることを強調し、プロレタリア独裁の理論的根拠を否定しようとするものであったことはいうまでもない。実際、ベルンシュタインの指摘するように、一九世紀末のイギリスにおいては、労働組合はかなりの影響力をもち、窮乏化をやわらげそれによって労働者階級の生活水準がかなりひき上げられたことは事実である。だからこそエンゲルスは、『イギリスにおける労働者階級の状態』の一八九二年ドイツ語版への序言」において、「第二の部隊は、大労働組合である。それは、成年男子の労働だけがもちいられているか、またはそうでなくてもそれが主としてもちいられている労働部門の組織である。……彼らの状態は、一八四八年以来たしかにいちじるしく改善された。そのなによりの証拠は、この一五年以上もの間、彼らの雇主が彼らにたいしてひどく満足してきただけでなく、彼らもまた彼らの雇主にたいしてひどく満足してきたことである。彼ら

は、労働者階級中の貴族を形成している……」[4]とのべたのである。もちろんエンゲルスは、このような労働貴族は、イギリス労働者階級中のきわめて小部分をしめるにすぎず、たとえば、ロンドンのイースト・エンドにみるように大多数の労働者の貧困と絶望、肉体的・精神的堕落のますますひろがっていく泥沼への沈淪と、これにたいする抵抗ともいうべき一八八九年のロンドンの大ドック・ストライキに象徴されるような「社会主義への新しい目覚め」を指摘することを忘れなかったばかりか、さきにのべたように、エンゲルスは、社会主義革命が、イギリスを中心としておこるという信念は毫も変っていなかったけれども、それにもかかわらず、イギリスに関する限り、窮乏化が、かなり緩和されることを認めたことは事実である。それでは、イギリスにおける革命の可能性はといえば、このような状態のなかでの社会主義革命到来の必然性は、イギリスにおける工業独占の崩壊と労働者階級の窮乏化、大規模な世界恐慌とそれにつづく世界革命という構造となるのであって、実に、マルクスの「経済学プラン」の最後が「世界市場」となっているのもこれと密接な関係がある。[6]

マルクスとエンゲルスは、このような「世界革命論」をもって終生一貫していたといっても過言ではないが、その場合に、資本主義体制は、急速に全世界を席捲するものと想像していたことは、例えば共産党宣言の叙述からも明らかであって、晩年のエンゲルスもほぼ同様に考えていたといってもよいであろう。十九世紀後半以後、イギリスを中心に、イギリスが農業的世界のただひとつの大工業中心地となるべきだという自由貿易論者の仮定は崩れ、[7]資本主義はその不均等性を是正し、イギリスの工業的独占は打ち破られて、全世界に資本主義が発展するという均等化傾向の見解である。このような前提の上ではじめて、大規模な世界市場の恐慌の爆発と、世界革命論が理論づけられる根拠があったのであって、実にマルクスとエンゲルスは、資本主義発展における均等化傾向を強調し重視する余り、独占資本主義段階におけるその不均等性を認識しえなかったのである。

資本主義の発展は、資本制蓄積の一般的法則の貫徹の過程であるとともに、まさしく、レーニンによって規定されたように、帝国主義的段階においては、不均等発展の法則の支配が、より一層その貫徹を徹底的なものとせずにはおかない。資本主義における不均等発展は、一国内においては個々の企業、個々の産業部門における不均等性としてあらわれるが、資本主義諸国間においてもこの法則は貫徹する。[8]レーニンが強調したのは、発展した独占資本主義国内における巨大独占体と非独占資本部門との矛盾のみならず、少数の発達した独占資本主義国との矛盾である。ここでいうところの非独占資本主義国とは、後進国＝農業地帯のみではない。高度に発達した工業国をも含むのであり、この点を理解せずに帝国主義の本質を規定したところに、カウツキーの根本的な誤謬があり、レーニンの論難の対象となった理由がある。[9]「もし資本主義が、現在いたるところで工業よりもおそろしく立ちおくれている農業を発展させることができるならば、またもし、目まぐるしい技術的進歩があるにもかかわらず、いたるところで半飢餓の乞食のような状態にとりのこされている住民大衆の生活水準を、資本主義がひき上げることができるならば、――その場合には、もちろん、資本の過剰などということは問題となりえないであろう」。[10]だが、それは資本主義のもとでは不可能であり、「資本輸出の必然性は、少数の国では資本主義が『爛熟し』、資本にとっては（農業の未発達と大衆の貧困という条件のもとで）、「有利な」投下の場所がないということによって、創り出される。[11]その結果として、いくつかの海外の諸国や植民地の労働の搾取によって生活している国全体にたいして、寄生性という刻印をおす」。[12]レーニンはさらに、結論的につぎのようにいっている。「独占、寡頭制、自由への熱望にかわる支配への熱望、少数のもっとも富裕なあるいはもっとも強力な民族による、ますます多数の弱少民族の搾取――すべてこれらが、帝国主義を寄生的あるいは腐朽しつつある資本主義として特徴づけさせる帝国主義の諸特徴を生み出したのである。……個々の産業部門、ブルジョアジーの個々の層、個々の国は、帝国主義の時代には、程度の大小はあるにしても、これらの傾向のうちのどれかをあらわしている。しかも全体としては、資本主義は、以前とは比較にならないほど急速に発展するのである。もっともこの発展は、一般にますます不均等となるばかりでなく、その不均等はとくに資本力のもっとも強い

国々（たとえばイギリス）の腐朽化のうちにあらわれている」[13]。

このような帝国主義のもとでの不均等発展の法則の支配と腐朽化は、一体プロレタリアートおよびその運動にたいして、どのような結果をもたらすであろうか。マルクスは、一八六九年六月の「ブリュメール十八日」の再版序文の最後で、つぎのようにのべている。「ローマのプロレタリアートは、社会の費用で生きていたが、近代社会はプロレタリアートの費用で生きている、というシスモンディのたいせつな言葉をひとは忘れている」とのべているが[14]、レーニンはさらに、帝国主義の腐朽性の諸特徴について詳細に論じたのち、マルクスが強調したこのシスモンディの深遠な評言によってのべられた事態を帝国主義はいくらか変更したとして、「帝国主義強国のプロレタリアートの特権的な層は、ある程度、幾億の非文明諸民族の費用で生活している」とのべている[15]のはまことに印象的である。本来、社会主義革命の担い手たるべき先進国のプロレタリアートが、その革命性を喪失していく過程はまさにそこにあるのであって、この場合、レーニンのいう「幾億の非文明諸民族」というのは、具体的には、おそらくアジア・アフリカ諸国であると考えられる。ヨーロッパのプロレタリアートを主勢力とするところの第二インターナショナルの崩壊、ロシア革命の勃発、そしてその後の半世紀における東ヨーロッパおよびアジア諸地域における社会主義革命の成功を考えるとき、資本主義的蓄積の一般的法則、従って窮乏化法則の支配は、以上にのべた先進国のプロレタリアートの「生活費用」をも自己の犠牲において負担すべく強制された後進諸民族のプロレタリアートにとって、まことに耐えがたい桎梏と化したことはきわめて当然であった。この法則の廃絶は資本主義体制の打倒以外にはありえないのであるが、その場合、きわめて重要な問題として、資本制生産の廃止と不可分の関係において、いわゆる「共同体」の問題がでてくるのである。なぜならば、実に先進資本主義国の生活費用の一部をも負担を強いられる諸民族、レーニンのいうところの「非文明諸民族」――具体的にはアジア・アフリカ諸国を中心とする世界の広汎な被圧迫民族――にとっては、社会主義革命の問題は、現実に彼らがその生活の大部分がそこにくみいれられているところの共同体の問題を回避して考えることはできなかったからである。そして今日もなお、現実にわれわれが目撃しつつあるアジアにおける革命――たとえば中国における文化大革命を考えよ――を考えるとき、これは、一応、西欧的近代化の道を辿ったといわれるわれわれにとっても、決して看過することのできない重要な問題を秘めている。

マルクスは、その「経済学批判」において、「大ざっぱにいって経済的社会構成が進歩していく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式をあげることができる」[16]として、「諸民族における共同所有とその崩壊の諸形態」についてのべたあとで、「アジア的な、ことにインド的な共有形態をもっと詳しく研究してみるならば、自然発生的な共有のさまざまな形態から、その解体のさまざまな形態が、どのようにして生ずるかを証明し得よう」という意図のもとに、いわゆる「共同所有の形態」の研究の重要性を指摘しようとしている[17]。それにかんする問題の指摘が、一八四五～六年の草稿「ドイツ・イデオロギー」の最初の部分にはじめてとりあげられ[18]、やがてまず「経済学批判要綱」にあらわれつぎに「経済学批判」にあらわれ、さらに、「資本論」において[19]、かなり体系的な形であらわれたという事実は[20]、彼が、資本の本源的蓄積の過程において崩壊させられていく共同体的所有、つまり「資本制生産に先行する諸形態」[21]にいかに深い関心を抱いていたかが窺われるのであって、それは、あたかも一八五〇年代から六〇年にかけてようやくはげしくなっていた植民地問題・民族解放運動を無視して考えることはできない。すなわち一八四〇年代以後、ヨーロッパ資本主義の波濤は、中国大陸やインドの岸辺を洗うに至って、そこに見出すところの共同体的所有を基礎とする社会構造にどのような影響を与え、その内部にどのような変質や抵抗をよびおこしたか、これによって、いわゆるアジア的生産様式といわれるものの理解を深め、これを通じて、一般に資本主義の成立＝資本の本源的蓄積過程の開始以前における共同体的共有の本質の把握に到達しようと試みたものであるということができる。それでは、マルクスは何のためにこの問題にかくも深い関心を抱いたのであろうか。それはおよそつぎのような二つの意味に理解されるのである。すなわち、ひとつは、アジア的生産様式の基礎をな

す自給自足的村落共同体と国家との関係、すなわちアジアにおける専制権力の基礎としての共同体の問題であり、いまひとつは個人と共同体との関係において、人類の未来社会との関連である。ここでわたくしは、マルクスが「経済学批判要綱」の序説(3)経済学の方法のなかで、「ブルジョア社会は、もっとも発展した、またもっとも多様な、生産の歴史的組織である。だから、その諸関係を表現する諸範疇は、その仕組みの理解は、同時に、没落しさったすべての社会形態の仕組みと生産関係への洞察を可能にする」[22]と規定したのち、さらに(4)においてのべているつぎのような美しい文章を読んだときの感銘を忘れることはできない。ここを読んだ誰しもそのようには感じなかったであろうか。

「おとなはふたたび子供になることはできないし、でなければせいぜい子供っぽくなるだけである。だが、子供の無邪気さは彼を喜ばせないだろうか？　そして、より高い段階で、自分の真実さを再生産するために、ふたたびみずから努力してはならないだろうか？　わんぱくな子供もいればませた子供もいる。古代民族の多くはこの範疇にはいるのである。正常な子供はギリシア人であった。彼らの芸術がわれわれにたいしてもつ魅力は、それがおいたつ基礎をなした未発展な社会段階と矛盾するものではない。《魅力は》、むしろこういう社会段階の結果であって、むしろ芸術がそのもとで発生し、しかもそのもとでだけ発生することのできた未熟な社会的諸条件が、けっしてふたたびかえってきはしないということと、不可分にむすびついているのである」[23]。

永遠の魅力を湛えている人類の歴史的幼年時代にたいするマルクスのこの高い評価は、何かしら、人類の未来社会＝共産主義社会への想いを秘めているように感じられるのである。しかしそれは共同体の讃美ではなく、「けっしてふたたびかえってきはしない」未熟な社会の発展段階の産物としてその魅力をとらえており、むしろ生産力の発展は、永遠の魅力を湛えたギリシア社会をも過去のものとし、資本の本源的蓄積の過程によって、共同体的な規制は、ヨーロッパの場合、徹底的に崩壊せしめられることを強調しているのが「資本論」であるといっても過言ではない。エンゲルスもこの「共同体」の問題に早くから関心を示し、一八四八年のドイツ三月革命の直後、一八五〇年、「ドイツ農民戦争」においては、農村共同体の崩壊と階級闘争の問題にふれ、また晩年の一八八四年、六三歳のときに、「家族・私有財産および国家の起源」を書き、これによって、原始共産制社会の態様にたいする認識を深めたのであった。

このように、ヨーロッパ社会においては、ドイツ農民戦争から市民革命の本格的進展の過程で、徹底的にその基盤を掘りくずされるに至った共同体が、アジアおよびその他の諸地域においては何故にかくも長く支配的でありえたかという問題こそ、彼らの重要な課題であるが、わたくしはいまこの問題にふれることはさし控えなければならない。ただ、共産主義革命が、西ヨーロッパではなく、東ヨーロッパおよびアジアにおいて勃発し、しかも成功しえたのは、実にこの共同体的遺制と密接な関連があることを指摘することにとどめる。

すでに指摘したように、マルクスとエンゲルスは、イギリスの第一の植民地としてのアイルランドにおける農民問題に深い関心をもっていた。それは何よりも植民地的支配と地主的土地所有のもとでのますます強まっていく収奪の傾向を、資本制蓄積の一般的法則の例証としてみたのであるが、同時にそれは、農業プロレタリアートの大規模な叛乱によって、アイルランドにおける地主的＝資本家的土地所有すなわちイギリス資本主義が大打撃をうけ、資本主義打倒のための革命の狼火としての意義を期待していたからであった。しかしプロレタリア革命は、実際には、資本家的大農経営が進み、共同体の基礎が掘りくずされたアイルランドではなくて、むしろ共同体的規制の根強いロシアにおこり、それがその後のプロレタリア革命を規定したことは疑いえない。それは、資本主義の不均等発展の法則と根強い共同体の残存により、ロシアにおいて、資本制蓄積の一般的法則としての窮乏化法則が、世界史に類例をみないほどのきびしさをもって貫徹したからにほかならない。

資本の本源的蓄積の過程によって、共同体の崩壊が徹底的におしすすめられ、資本制生産様式が支配的となった西ヨーロ

ッパ諸国におけるプロレタリア革命は、まさしくマルクスとエンゲルスの問題であったが、彼らがすでに一八五〇年代において洞察していたアジア的生産様式の問題、その東洋的停滞性は、アジアにおける革命とどういう関係があるのであろうか。中国革命を想うとき、実に革命にとってのもっとも重要な条件のひとつとして、このアジア的生産様式[24]と共同体の問題があったといえよう。レーニンの一国社会主義の理論は、マルクス主義の革命理論のレーニンによる帝国主義段階におけるいわば応用であった。すなわち、発展した資本主義諸国における窮乏化法則の緩和は、実は、共同体的桎梏のいまなおきびしい国々の犠牲においてなされたものであることは、レーニンの「帝国主義」の結論から推論されるところであり、その意味においては、窮乏化法則は、今日、絶対的にも相対的にも妥当するのである。それゆえにこそ、「資本論」はいまなお、革命理論にとって重要な意義をもつ。

(1) マルクスとエンゲルスは、一八八二年「共産党宣言」のロシア語版序文に、ヨーロッパの資本主義が、一八四八年の時代とは到底比較にならぬほど変った理由として、アメリカ合衆国とロシアが、その当時に比べて、経済的にきわめて重要な役割を演ずるに至ったからだとしているが、とくに、ロシアについて、つぎのようにのべているのは注目に値しよう。

「それでは、ロシアはどうか！　一八四八―四九年の革命のときには、ヨーロッパの君主たちだけでなく、ヨーロッパのブルジョアもまた、ようやくめざめかけていたプロレタリアートから自分たちを守ってくれる唯一の救いは、ロシアの干渉であるとみていた。ツァーリはヨーロッパの反動派の首領である、と宣言された。今日では、彼はガッチナで革命の捕虜となっており、ロシアはヨーロッパの革命的行動の前衛となっている。

『共産党宣言』の課題は、近代のブルジョア的所有の解体が、不可避的にせまっていることを宣言することであった。ところが、ロシアでは、資本主義の狂熱が急速に開花し、ブルジョア的土地所有が発展しかけているその半面で、土地の大半が農民の共有になっていることがみられる。そこで次のような問題が生まれる。ロシアの農民共同体（オブシチナ）は、ひどくくずれてはいても、大昔の土地共有の形態であるが、これから直接に、共産主義的な共同所有という、より高度の形態に移行できるであろうか？　それとも反対に、農民共同体は、そのまえに、西欧の歴史的発展でおこなわれたと同じ解体過程をたどらなければならないのであろうか？

この問題にたいして今日与えることのできるただひとつの答は次のとおりである。もし、ロシア革命が西欧のプロレタリア革命にたいする合図となって、両者がたがいに補いあうなら、現在のロシアの土地共有制は、共産主義的発展の出発点となることができる」〔一八八二年、「共産党宣言」ロシア語版序文〕Marx/Engels, Werke, Bd. 4. SS. 575-576. 邦訳大月版、五九二―五九三頁。（但し傍点引用者）。

(2) この問題にかんしては、菊地昌典「歴史としてのスターリン時代」（一九六六年、盛田書店）第五章、一国社会主義論の論理は、まことに示唆的であり、学ぶところ多かったことを記す。

(3) Eduard Bernstein; Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, 1889, neue, verbesserte und ergänzte Ausgabe, 2 Aufl., 1921. 戸原四郎訳「社会主義の前提と社会民主党の任務」（世界大思想全集、社会・宗教・科学思想篇15、河出書房新社、一四六頁。訳文は専らこれによる。）

(4) Marx/Engels, Werke, Bd. 2. S. 645. 邦訳第二巻六四七頁。

(5) 資本制的蓄積の一般的法則は、他のあらゆる法則と同様に、その実現に際して多様な諸事情によって変更されることを、もちろん、マルクスは認めているのであって、たとえば、「絶えず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗の増大も（「資本論」第一巻第四分冊、岩波文庫、三四九頁）、窮乏化法則を修正するといわなければならない。なお、窮乏化法則については、遊部久蔵編著「『資本論』研究史」の第三章窮乏化論（井村喜代子）が参考になる。また服部英太郎「社会政策理論と『窮乏化法則』」（服部英太郎著作集V、「国家独占資本主義社会政策論」所収）および金子ハルオ「現段階での窮乏化法則」（宇佐美、宇高、島篇「マルクス経済学講座」2「現代帝国主義論」有斐閣、一九六四年所収）も示唆的な論文である。その他、やや公式的ではあるが、Jürgen Kuczynski の諸著作（たとえば、「絶対的窮乏化論」、新川士郎訳、有斐閣）が参考にされるべきである。また最近では、ヴァルガの注目すべき見解「資本主義経済学の諸問題」（村田陽一、堀江正規の訳〈岩波書店〉）も紹介されている。

(6) これについては、原田三郎「帝国主義の理論的位置」（東北大学経済学部、研究年報「経済学」、第二一巻第二号、一九五九年53）および佐藤金三郎「『資本論』と『帝国主義論』」（「思想」一九六七年五月号所収）に負うところが多い。

(7) エンゲルス「『イギリスにおける労働者階級の状態』の一八九二年ドイツ語版への序言」、Werke, Bd. 2, S. 646. 邦訳六七五頁。

(8) レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」宇高基輔訳（岩波文庫）二〇一頁。なお、この問題については、清水嘉治「帝国主義論研究序説」（有斐閣、一九六五年）第五章「『帝国主義論』と不均等発展の法則」が有益である。

(9) レーニン、前掲書、一四六頁以下。なおこの問題については、石母田正「続・歴史と民族の発見――人間・抵抗・学風――」（東大出版会、一九五三年）二五四頁、「民族＝植民地問題における一つの問題について」を参照。

(10) レーニン、前掲書、一〇三頁。
(11) 前掲、一〇三頁。
(12) 前掲、一六二頁。
(13) 前掲、二〇一頁。
(14) マルクス「ブリュメール十八日」の一八六九年版の序文、「マルクス・エンゲルス選集」大月版、四二三頁。
(15) レーニン「帝国主義と社会主義の分裂」（国民文庫版、「帝国主義論」、堀江邑一訳、所収）。
(16) マルクス「経済学批判」（岩波文庫版）一四頁。
(17) マルクス前掲書、三一頁の註参照。
(18) Marx/Engels, Werke, Bd. 3. SS. 23 ff. 邦訳、全集、第三巻一八頁以下（一、フォイエルバッハ、A、イデオロギー一般、とくにドイツ・イデオロギー）。
(19) 「歴史のしめすところでは、むしろ共同所有（Gemeineigentum）（たとえばインド人、スラヴ人、古代ケルト人等々のばあいの）が所有の本源的形態であって、この形態は、共同体所有（Gemeinde-eigentum）という姿で、なお長いあいだ一つの重要な役割を演じている」（マルクス「経済学批判要綱」（草案）一八五七―五八年、高木幸二郎監訳、大月書店、第一分冊序説一九頁）。
(20) 「資本論」においては、きわめて広汎に、それについての叙述を見出すことができる。繁雑にわたるので割愛するが、詳細については、本田喜代治編訳「アジア的生産様式の問題」（岩波書店、一九六六年）を参照のこと。
(21) 「経済学批判要綱」のなかの一部としてあらわれた（邦訳、第三分冊四〇七頁以下）この部分は、単独の論文としてもあつかわれる。マルクス「資本制生産に先行する諸形態」（青木文庫、岡崎三郎訳）。なお、大塚久雄「共同体の基礎理論――経済史総論講義案」（岩波書店）は、これからいちじるしい影響をうけて書いた著作として興味深い。
(22) 前掲、批判要綱、第一分冊、二七頁。
(23) 前掲書、三三―三四頁。
(24) アジア的生産様式と共同体的所有の問題との関係はむずかしく、筆者にとっても充分に理解できたとはいえない段階にある。例のヴァルガの論文「アジア的生産様式」によると、彼自身も、マルクスの仮説の正しさについて、十分な認識をもっていないことをのべている（ヴァルガ、前掲書、三八六―四一六頁）。

四　結　び

わたくしはここで、中国の文化大革命に想いを馳せる。共同体の徹底的な崩壊を体験せず（その意味ではわが国も同じであるが）、むしろそれどころか、共同体的規制の根強い国において、プロレタリア革命が成功し、革命の事業が軌道にのり、その後においてブルジョア・デモクラシーの攻撃に接した場合、どうなるか。現在の「ソヴェート共産主義」は、そのもっとも典型的な例証をわれわれに提示する。共同体の徹底的な崩壊と階級分解、そしてその後につづく資本制生産様式の全面的展開、階級闘争の激化とこれにつづく社会主義革命という経路を辿る代りに、共同体の残存とそれによる生存それ自体の根強い規制を破棄することなしに、むしろある程度その上に立って社会主義化が上からおし進められなければならなかった国が、ひとたび、ブルジョア・デモクラシーの滲透をうけた場合、どのような危機に際会するか。現在、ソヴェート革命以来、今年で五〇年を迎えたソヴェート共産党の変転は、その意味で、世界の共産主義運動にたいし、深刻にして且つ無限の教訓を与えるものではないだろうか。中ソ論争から最近の文化大革命に至るまでの中国によるソヴェートにたいするはげしい非難、とくに「修正主義」攻撃は、ソヴェート共産党にとっての苦悩であるばかりでなく、実に中国自体いずれは直面すべき問題なのであり、「革命」の点ではほぼ似たような状況（もちろん同じではないが）にあるわれわれにとっても看過することのできない問題というべきであろう。

農村共同体にかんするマルクスの晩年の思想は、その社会主義的共同体への移行の可能性か、あるいは西欧にみるように、その崩壊と階級分解そして資本主義化のいずれかであった。しかし、農村共同体と社会主義革命の問題との関連についていえば、そのいずれでもなく、共同体の不徹底な分解ないしその根強い残存という条件のもとに革命を急速に成就させねばならなかった。共同体的土地所有そのものは、一応、社会主義革命によって解体させられ、新たに社会主義的に再編成

されるとしても、上部構造そのものは急速に変化せしめることはできない。中国における文化大革命の過程を観察するならば、その目的のひとつがこうした思想変革にあることが明らかであろう。

ひるがえって、わが国はどうであろうか。一九六〇年頃から始まった高度成長政策のもとで、農村共同体は、根底から崩壊せしめられている。農村における階級分解は急速に進んでいるといえよう。「資本主義は永遠ではありえない」とすれば、わが国の場合、変革への道はどのような方向を辿るのであろうか。

――一九六七・七・一〇――

〈追記〉「資本論」一〇〇年にあたって、その記念号に執筆の機会を与えられたことに大きな喜びを感じている。「資本論」にたいする研究の浅い筆者にとっては、まことに僭越なことであるが、平生から、この人類解放の先駆者にたいする尊崇の念厚く、百年に一度しかおとずれぬこの機会に、思想の一端を披瀝させていただいた次第である。率直に云って、慶應義塾経済学部には、ここに御執筆の方々のほかに、すぐれた多くの「資本論」研究者がおられるにもかかわらず、いろいろな事情で、この機会にその方々の御説に接することができないことを、かえすがえすも残念に思うものである。最後に、編集責任者であられる遊部久蔵先生の御厚情に感謝致します。

信用と恐慌との連繋について

――一つの覚え書――

飯田裕康

一　問題の所在
二　恐慌論体系と信用論（一）
三　恐慌論体系と信用論（二）
四　「連繋」の基本的契機（一）
五　「連繋」の基本的契機（二）
六　利子率急騰の原因論
七　銀行資本の過多と貨幣資本の不足――結語にかえて――

一　問題の所在

信用は、元来、商品流通にともなう商品の価格実現の時間的分離の形態として、その自然発生的基礎を与えられた。信用は、他方で、貨幣の支払手段機能を必然的にともなうことによって、商品流通の拡大、価格実現を維持することを可能とした。このような関連は、信用が商品流通に必然的にともなう貨幣流通を基盤とすることなくしてなりたち難いことを物語っている。同時に、こうした関連の破壊が、支払不能から貨幣恐慌をひきおこすことをものがたる。